



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高等学校における英語の主語の指導に関して
Author(s)	大竹, 政美
Citation	北海道大學教育學部紀要, 56, 27-71
Issue Date	1991-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29366
Type	departmental bulletin paper
File Information	56_P27-71.pdf



高等学校における英語の主語の指導に関して

大 竹 政 美

On Teaching the Grammatical Subject of the English Language at Senior High Schools

Masami OTAKE

目 次

0. はじめに	27
1. 英語の主語の諸特性と指導過程の基本構造	27
2. 文の主語の指導過程	29
3. 今後の課題	58
付. 実験授業から	68

0. はじめに

筆者の見解では、外国語教育の教育内容体系の「文法の知識を形成する領域」(大竹 1989:132)においては、目標言語の「[文の] 形式と意味 [, および、それらの関係のすべての側面] の知識」を形成し、その言語の任意の「文を産出したり認識したりできる」ようにすることが目指される(大竹 1988:94-95)。文法の知識を形成する領域のうち、文の「統語構造」と「意味のパターン」を形成する、統語論と意味論の知識を形成する下位領域を成すのが、「(狭義の) 文法教育」である(大竹 1990:121)。

本稿では、高等学校段階での外国語教育としての英語教育における文法教育のための一連の教授プログラムのうちで、主語をその教育内容とする教授プログラムを作成しようと試みることにする。なお、本稿は、1990年度文部省科学研究費補助金(奨励研究(特別研究員))(課題番号02951061)による研究成果の一部である。

1. 英語の主語の諸特性と指導過程の基本構造

英語では、「主語 (subject)」という文法機能は、以下のような諸特性によって、節における他の文法機能から区別される (Rodney Huddleston, *English Grammar: An Outline* (1988), pp. 49-51)。例えば、

- (1) Your father washed the car again.

では、your father が文の主語として機能している。

- (a) 「形式類 (form class)」。原型的な主語は「名詞句」である。(1)では、主語という機能の候補は、名詞句である your father と the car である：この特性は、動詞の washed と副詞句の again を除外する。
- (b) 「平叙 [文] における位置」。平叙文では、主語の普通的位置は、「動詞の前」である。(1)で

は, *your father* と *the car* が, それらの線形の位置のおかげで, それぞれ主語と目的語として区別される。

- (c) 「疑問 [文] における位置」. 「操作語 (operator)」を含む主節では, 最も単純な種類の疑問文は, その対応する平叙文から, 「操作語を主語の左に移動する」ことによって派生される [ここで「操作語」というのは, *can*, *may*, *must*, *will* などの法助動詞, 完了の *have*, 進行の *be*, 受動の *be*, 本動詞の *be* のことである。ただし, 指導過程では, 法助動詞, 完了の *have*, 進行の *be*, 受動の *be* を含まない文の主語しか扱わない]。たとえば, *Your father is washing the car again* という平叙文は, *Is your father washing the car again?* という疑問文を生み出す。平叙文が操作語を含まない場合には, 疑問文は, 「その位置にダミー (dummy) の *do* を導入する」ことによって形成される: (1) の疑問文は, *Did your father wash the car again?* である。いずれの場合でも, 主語は, 結局, 時制が表示された (助) 動詞の後に続くことになるので, *your father* は, 時制が表示された *is* と *did* の後という位置によって, 主語として認定される。
- (d) 「主語-動詞の一致 (subject-verb agreement)」. 「動詞の人称-数の特性 (person-number properties)」は, 主語との一致 (agreement) によって決定される。たとえば, *Your father likes it* では, *likes* は 3 人称単数の *your father* と一致している。 *your father* を *your parents* で置き換えれば, *likes* は *like* で置き換えられる。法助動詞や, *be* 以外の動詞の過去形には, 人称-数の特性がない。
- (e) 「人称代名詞 (personal pronoun) の格 (case)」 [指導過程では, 格は, 「主格」に固定するので, 省略する]。
- (f) 「省略可能性 (omissibility) に対する条件」 [指導過程では, 主語が義務的である場合を扱うので, 省略する]。

英語の主語のこのような諸特性から, 指導過程の基本構造は, 次のようになる。まず, 主語の内部構造 ((a)) を扱う。次に, 主語の位置 ((b), (c)) を扱う。最後に, 主語の機能 ((d)) を扱う。ただし, (c) には主語とダミーの *do* との一致が関わってくるので, 全体構造は, (a)-(b)-(d)-(c) となる。さらに, 主語が英語の文法において重要な概念であることを知らせる導入が必要である。こうして, 教授プログラム「英語の主語の構造・位置・機能」は, 次のように構成される。

0. はじめに [→導入]

1. 主語の内部構造 [→(a)]

(1) 名詞句が主語として働く場合

- (ア) 名詞句の構造
- (イ) 冠詞
- (ウ) 名詞の数
- (エ) 冠詞と名詞の組み合わせ
- (オ) 名詞句の構造 (続)

(2) 代名詞が主語として働く場合

- (ア) 性の区別
- (イ) 人称の区別
- (ウ) 数の区別

2. 主語の位置 [→(b)]

3. 主語の機能 [→(d)]

(ア) 主語と [be 以外の] 動詞の一致

(イ) 主語と動詞 be の一致

4. 主語の位置 (統) [→(c)]

次の2. では、この教授プログラムの0. ～2. の部分だけを、解説とともに示すことにする。

2. 文の主語の指導過程

2. 0 文の意味解釈への主語の寄与

人間言語は、「一列並べ」という宿命をもっており、「単語を、どのような並べ方にせよ、とにかく、一列に並べなければ、ものが言えない仕組み」になっている。「単語をあとさきの区別なく、同時に発音したり書いたりする」ことはできない(安井 稔『英語学概論』, 1987年, p. 49)。世界の言語を「語順」という点から見ると、「二つの極をなす特徴」が見られる。一つは「語用論的語順」であり、もう一つは「文法的語順」である。語用論的語順というのは、「旧情報」と「新情報」との区別、すなわち、「聞き手がすでに知っている(話し手によって)考えられていること」と「聞き手がまだ知らない(話し手によって)考えられていること」との区別を示す働きを持っている語順(例. ロシア語)のことである。これに対して、文法的語順というのは、「単語の並び方」によって、「情報構造」ではなく、「文法関係」が示されるようになっている語順(例. 英語)である(安井 1987: 150-151)。

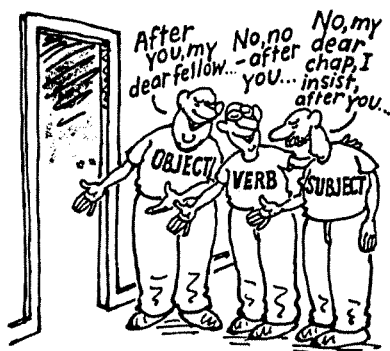
英語は、「文法的な語順が固定している」言語である(安井 1987: 152)。「主語 [名詞句]」「動詞」「目的語 [名詞句]」を含む文では、主語名詞句は動詞に先行し、動詞は目的語名詞句に先行する(David Crystal, *Rediscover Grammar* (1988), p. 21)。例えば、二つの名詞句(例. the bear, the man)と一つの動詞(例. killed)から文を構成する場合、単語の並べ方には、 $3 \times 2 \times 1 = 6$ 通りの可能性がある[英語の文として非文法的なものも含む]が、「語順の変更によって、文法関係が変わって[しまう]」(安井 1987: 150, 152)。

0. はじめに

(問題)

次の語句を使って、英語の文を作りなさい。そして、できた英語の文を日本語に訳しなさい。

{ killed, the bear, the man }



漫画は Edward
McLachlan による
(Crystal 1988 :
21)

-1-

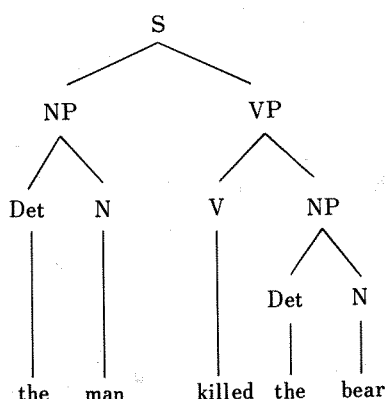
文の意味は、文の統語構造と切っても切れない関係にある。文の意味を理解しようとするれば、その文の統語構造に関する知識が不可欠となる。

- (1) a. The man killed the bear .
b. The bear killed the man .

(1 a) と (1 b) とでは、同じ単語から組み立てられている文であるにもかかわらず、「殺すもの」と「殺されるもの」との関係が逆になっている。この違いは、二つの文の統語構造に、特に、「主語・目的語」として、それぞれ、何が選ばれているかに依存している (安井 1987 : 176)。

同一の単語から成るこれら二つの「文の意味内容が異なる」のは、「単語の並べ方が異なる」からである。英語では、「単語の配列順に、一定の意味をもたせる」仕組みになっている。ここで「一定の意味」というのは、動詞によって集約的に示される事態 ((1) の場合、殺すという「行為」) に関して、その「行為を行う『動作主』」(agent) はどの名詞句によって示されるものであり、その「行為によって影響を受ける『被動者』」(patient) はどの名詞句によって示されるものであるか、というようなことに関するものである。これらのことは、一定の種類の動詞に対して、どれが主語名詞句であり、どれが目的語名詞句であるか、というようなことによって決まってくる (安井 稔『英語学と英語教育』, 1988年, pp. 36-37)。

さらに、主語や目的語のような文法関係は何によって決まるかといえは、統語構造によってである。例えば、(1 a) の統語構造を枝分かれ図で示すと、次のようになる。



名詞 (N) man は決定詞 (Det) the とともに「名詞句」(NP) を成し、動詞 (V) killed は名詞句 (NP) [the bear] とともに「動詞句」(VP) を成しており、名詞句 [the man] と動詞句 [killed the bear] とがこの文 (S) を直接構成している (安井 1987: 148-149)。上のような統語構造において、「S によって直接支配されている、VP を相手とする NP」 [= S の NP] が主語であり、「VP によって直接支配されている、V を相手とする NP」 [= VP の NP] が目的語である (安井 1988: 37)。

(解説)

三つの要素から文を作る場合、三つの要素の並べ方として、論理的には、 $3 \times 2 \times 1 = 6$ 通りの可能性がある。

与えられた語句から、まず、次の二つの文ができる。

- (1) a. The man killed the bear. (その男は、そのクマを殺した。)
- b. The bear killed the man. (そのクマは、その男を殺した。)

これら二つの文は、まったく同一の単語から成るが、意味が異なっている。二つの文の意味が異なるのは、単語の並べ方・語順が異なるからである。単語の配列順が異なると、どうして文の意味が異なってくるかというと、英語では、単語の配列順に文法的な機能を持たせる仕組みになっているからである。つまり、英語では、固定された語順が、文の意味内容に結び付いているのである。結局、(1 a) と (1 b) との意味の違いは、何が文の先頭に来ているか、すなわち、この場合、何が文の「主語」であるかということによって決まってくる。

さらに、主語は何によって決まるかといえば、文の構造によってなのである。(1)の文は、次のように大きく二つの部分に分割される。

- (1') a. [The man] [killed the bear]
- b. [The bear] [killed the man]

文の二つの部分のうちの最初の部分である the man や the bear のような要素を「主語」と言うのである。

-2-

英語は、特に、「主語＋述語動詞」という語順を乱すことをきらい（安井 1987:152）。「語順の倒置」は、「文意の不明をきたさない」限りにおいて許される。文の意味が、「文を形造っている単語の意味」と「それらの単語を結びつけている文法関係」から成り立っているという単純化をすれば、語順の倒置によって引き起こされる文意の不明というものは、文法関係にかかわるものである（安井 1987:50）。

英語には、「一般に関与者の名で呼ばれているものを表す名詞句は、すべて、文頭の位置に移動させることができる」という規則がある（安井 1987:152）。(1)の文の統語構造に、この「話題化（topicalization）」と呼ばれる操作を加えると、次の文が得られる。

- (2) a. The bear, the man killed.

(いま話に出たそのくまを、その男が殺したのです。)

- b. The man, the bear killed.

(いま話に出たその男の人を、そのくまは殺したのです。)

(2 a), (2 b) は、それぞれ、() 内の日本文から察せられるような文脈において用いられる。「知的意味」あるいは命題の意味に関する限り、(2 a) は (1 a) に、(2 b) は (1 b) に対応する意味を表す（安井 1987:176）。ただし、名詞句を文頭に移動するという操作の後でも、「主語 [名詞句] + 動詞」という語順はそのまま保たれる（安井 1987:152）。(2 a), (2 b) では、目的語名詞句が文頭に移動されているが、(1 a), (1 b) と文法関係は変わらない。

また、与えられた語句から、次のような文もできる。

- (2) a. The bear, the man killed. (そのクマを、その男が殺した。)

- b. The man, the bear killed. (その男を、そのクマが殺した。)

(2) は、(1) という基本的な文に、(1) の文の最後の要素 —— the bear や the man —— を文の先頭の位置に移動させるという操作を加えた、派生的な文であると言える。(2) では、主語である the man や the bear と killed の語順が (1) と同じに保たれていることに注意しなさい。(2 a), (2 b) は、それぞれ、() 内に添えられた日本文から察せられるような文脈において用いられる。(2 a) は (1 a) に、(2 b) は (1 b) に対応する意味を表す。

最後に、次のような文は英語の文ではない。

- (3) a. *Killed the man the bear.

- b. *Killed the bear the man.

(3)では、主語である the man や the bear と killed の順序が(1)とは異なっていることに注意しなさい。

-3-

2. 1 主語の内部構造

「主語は、普通、名詞句または代名詞である。」という立場 (Geoffrey Leech, *An A-Z of English Grammar and Usage* (1989), p.450) に従って、名詞句が主語として働く場合と代名詞が主語として働く場合とを区別することにする。

2. 1. 1 名詞句が主語として働く場合

2. 1. 1. 1 名詞句の構造

「名詞句 (noun phrase)」は、通例、「決定詞 (determiner)」で始まり、普通、「名詞 (noun)」を最も重要な単語、すなわち、「主要語 (head-word)」として持つ。名詞句の他の部分は、「修飾語 (modifier)」であって、それには、「(名詞の前の) 形容詞」と「(名詞の後の) 前置詞句」が含まれる (Leech 1989: 295)。英語で最もありふれた決定詞は、「定冠詞 (definite article)」の the と、「不定冠詞 (indefinite article)」の a / an である (Leech 1989: 115)。そこで、指導過程で扱う名詞句の構造は、(冠詞) - (形容詞) - 名詞 - (前置詞句) とすることにする。ただし、名詞の後の修飾語である前置詞句を含むものは、「(1)名詞句が主語として働く場合」の最後の部分で扱うことにする。

1. 主語の内部構造

(1) 名詞句が主語として働く場合

(ア) 名詞句の構造

(質問)

次の文の { } 中の単語を並べ換えて、主語を作りなさい。

1. { girl, the } is Mary Smith.
2. { girl, pretty, the } is Mary Smith.

-4-

(解説)

次のようになる。

1. The girl is Mary Smith.
2. The pretty girl is Mary Smith.

解説は (Quirk et al. 1985: 245) による

これら二つの文は、主語の働きを果たしているいくつかの単語のまとまり（下線を引いた部分）の主要部——最も重要な単語・中心的な単語——として、**girl**という同じ名詞を含んでいる点で似ている。

1の主語は、冠詞と呼ばれる単語 **the** と名詞 **girl** から成る。

冠 詞	名 詞
the	girl

2の主語は、それに加えて、名詞 **girl** を前から修飾する形容詞 **pretty** も含んでいる。

冠 詞	形容詞	名 詞
the	pretty	girl

-5-

修飾語は、「[主要語]の意味をもっと正確に指定する」ために付け加えることができる（Leech 1989: 262）。

定冠詞や不定冠詞のような決定詞は、「その名詞句が意味するものをもっと正確にするのに有用な装置」であって、「その名詞句によってどんな人または物が示されている（または指示されている）か指定する」のを助ける。このように、冠詞[一般に決定詞]は、「名詞句の指示(reference)を指定する」のに役立つから、「名詞句の指定部(specifiers)」であるといわれている（Herman Wekker and Liliane Haegeman, *A Modern Course in English Syntax*, 1985, pp. 36, 37）。

このように、主語の働きは、名詞を主要部とする単語のまとまり——句——が果たす。名詞を主要部とする単語のまとまりは名詞句と呼ばれる。つまり、名詞句は、主要部として必ず現れる名詞と、それに伴う一つまたはそれ以上の要素から成る。

	名 詞 句		
単語の部類	冠 詞	形容詞	名 詞
働 き	指定部	修飾語	主要部
	the		girl
	the	pretty	girl

「修飾語」とは、主要部の意味をより正確に述べるために付け加えられる要素であって、名詞句に現れることも現れないこともある。「指定部」とは、その句全体によって何が指し示されるかを指定するのに役立つ要素である。

-6-

2. 1. 1. 2 冠詞の定性

不定冠詞は、「話し手と聞き手の間で共通の了解事項となっていない」という意味で「不定 (indefinite)」の物や概念を表す名詞につけられる。したがって、不定冠詞は、「文脈にまだ一度も現れていない名詞」や、「なじみの薄い物や概念を表す名詞」につく。それに対して、定冠詞は、「話し手と聞き手の間で共通の了解事項となっている」という意味で「定 (definite)」の物や概念を表す名詞につく。現実の言語使用において、「共通の了解事項になっているか否か」を判断する決定権を握っているのは、話し手であって、聞き手ではない。

A house on the corner is for sale.

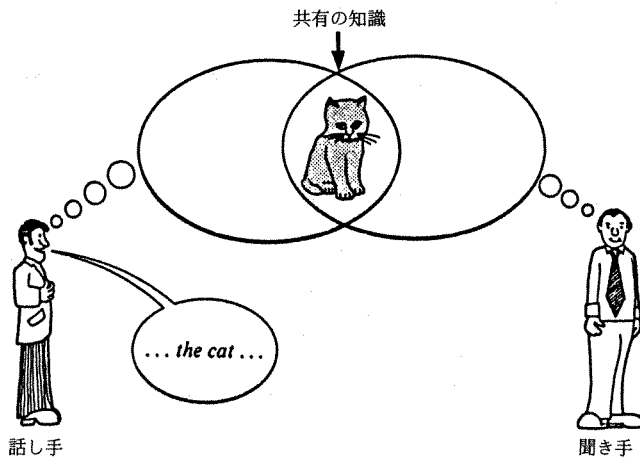
The house on the corner is for sale.

この場合、a が用いられても the が用いられても、話し手は特定の家を念頭に置いている。問題は、その家を「聞き手も知っている」と話し手が考えるかどうかである。聞き手も知っていると考えるときには the を用い、知らないと考えるときには a を用いる (有村兼彬・天野政千代『英語の文法』, 1987年, p. 148)。

(1) 冠詞

指定部の働きは、名詞句では冠詞が務める。冠詞には、the だけでなく、a / an もある。

the は、話し手と聞き手の共有の知識の中に入っていて、だれであるかわかる人やどれであるかわかる物などを表す名詞句で用いられる。



Leech (1981 : 157)

それに対して、a / an は、話し手と聞き手の共有の知識の中に入っておらず、だれだかわからない人やどれだかわからない物などを表す名詞句で用いられる。したがって、a / an の後には、文脈にまだ一度も現れていない名詞や、なじみの薄い人や物などを表す名詞が来る。

現実の会話では、共有の知識の中に入っているかどうかを判断する決定

権を握っているのは話し手であって、聞き手ではない。

次の例で、the が現れる場合と a が現れる場合とを比較してみよう。

The book arrived.

A book arrived.

このような場合には、the が用いられても a が用いられても、ある特定の具体的な本が話し手の頭の中に思い浮かべられている。問題は、その同じ本を聞き手も知っているか話し手が考えるかどうかである。聞き手も知っていると考えるときには、話し手は the を用い、知らないと考えるときには、a / an を用いる。

-7-

2. 1. 1. 3 名詞の数と可算性

英語の名詞には、形態上、「単数・複数」の区別がある。英語の名詞は、「単数形」と「複数形」以外の形は持っていない。必ず、単数形と複数形のいずれかの形をとらなければならない（安井 1988: 136-137）。次の二つの文を比較してみよう。

The tramp is reading his diary.

The tramps are reading their diaries.

名詞の「単数 (singular)」形 (例. tramp, diary) は「一」の数の人や物を指し示し、名詞の「複数 (plural)」形 (例. tramps, diaries) は「一より多い」数の人や物を指し示す。この、「単数と複数との対立 (contrast)」は、「数 (number)」の対立である (Wekker and Haegeman 1985: 58)。

なお、教授プログラムの中の、[] でくくられた部分は、授業中に生徒に書き込ませる箇所である。

(ウ) 名詞の数

英語では、文中に登場する人や物に関して、その数 (かず) が一か、二以上かの区別をつけて、名詞の形を変化させる。このような「一」と「二以上」との文法上の区別を「数」(すう) と名づけ、「一」を示す形を「[単数] 形」, 「二以上」を示す形を「[複数] 形」と呼ぶ。名詞句全体の数は、その主要部の名詞の数に等しい。

数	{	単数: 「一」を示す
		(名詞の [単数] 形 (を, 主要部として含む名詞句) について)
		複数: 「二以上」を示す
		(名詞の [複数] 形 (を, 主要部として含む名詞句) について)

単 数	複 数	
one spoon	two spoons	three spoons
		

漫画は Matthew Doyle による (Leech 1989: 365)

単数形と複数形という二つの形を持った名詞を、他の名詞と区別して、呼んだり書き表したりするときには、[単数] 形と同じ発音で呼び、[単数] 形と同じつづりで書き表す。上の例の場合、「名詞 spoon の単数形は spoon であり、複数形は spoons である」といえる。しかし、このような書き表し方だと、単数形 spoon と複数形 spoons という二つの形を持った名詞である spoon と、そのうちの単数形である spoon との区別が付けにくい。そこで、これから先は、名詞をく　　の中に入れて、「名詞<spoon>」の単数形は spoon であり、複数形は spoons である」のように書き表すことにする。

-8-

(問題)

辞書で次のそれぞれの名詞の複数形を調べ、発音してみなさい。

名詞	→	複数形	名詞	→	複数形
1 <cup>	→		11 <city>	→	
2 <hat>	→		12 <knife>	→	
3 <park>	→		13 <mouth>	→	
4 <girl>	→		14 <man>	→	
5 <dog>	→		15 <foot>	→	
6 <window>	→		16 <mouse>	→	
7 <potato>	→		17 <ox>	→	
8 <dish>	→		18 <child>	→	
9 <bus>	→		19 <sheep>	→	
10 <box>	→		20 <fish>	→	

名詞の選択は (大場 1981: 7) などによる

-9-

(解説)

名詞の複数形は、単数形と同じ発音・つづりを持っている「辞書の見出し語」から、次のようにしてつくられる。ただし、複数形のつくり方は、名詞ごとに決まっている。

(i) 辞書の見出し語の語尾に -(e)s を付ける。

例. <girl> → girls, <cup> → cups, <dish> → dishes

解説は (大場 1981: 5) に基づく

ただし、それとともに、辞書の見出し語の語尾のつづりや音が変わるものがある。

例. <city> → cities, <knife> → knives, <mouth> → mouths

(ii) 辞書の見出し語の母音を変えたり、語尾に -en を付けたりする。

例. <man> → men, <foot> → feet, <ox> → oxen

(iii) 辞書の見出し語の発音・つづりを変えないで、(i, ii) の複数形と同じように扱う。

例. <sheep> → sheep, <fish> → fish

-10-

世界には、英語では数えられないものがある。例えば、air (空気), rain (雨), beauty (美), joy (喜び) がそうである (安井 1988:137)。「可算名詞 (countable nouns)」とは、「[英語の母語話者] が数えることができる、別個の (separate) 対象、人、観念などの名」である。「不可算名詞 (uncountable nouns)」とは、「[英語の母語話者] が別個の対象とは見ない、素材、液体、その他の物の名」である (Michael Swan, *Basic English Usage* (1984), p. 78)。

これらの不可算名詞は、可算名詞である piece のような単語を介することによって、一種の可算的表現として用いることはできる。例えば、a piece of useful information のようにすれば、一種の「可算化操作」を行なったことになる。これは、不可算名詞である water などを、glass のような可算名詞を介して、a glass of water などのように、「形なく境界なき水を、一定の器を用いて切り取る」と同じ方式である (安井 1988:139)。しかし、切り取られることによって、不可算名詞が可算名詞になるわけではない。

英語の名詞には、個人や、個々ばらばらに存在する物のように、一、二、……と数えることのできるものを表す名詞だけでなく、物質・材料や概念のように、明確な輪郭を持たず、一、二、……と数えることのできないものを表す名詞もある。



図解は Marie =
Hélène Jeeves に
よる (Swan 1984
: 78)

つまり、英語の名詞は、単数形と複数形との区別がある名詞 (例. <car>) と、形が一つしかなく、単数形と複数形との区別がない名詞 (例. <milk>) とに分類される。数えることのできる人や物などを表す名詞は [可算] 名詞、数えられない人や物などを表す名詞は [不可算] 名詞と呼ばれる。辞書では、前者を [C]、後者を [U] で示している。

名詞 { 可算名詞 [C] ……単数形／複数形の区別 [あり]
不可算名詞 [U] ……単数形／複数形の区別 [なし]

どうしても不可算名詞を数えたいときには、*a cup of coffee* のように、容器に入れたり、計量する単位を使ったりして、区切って数えることになる。「一」と「二以上」との区別は、容器を表す名詞や単位を表す名詞の単数形と複数形との区別で示す。

a <i>glass</i>	}	of milk
two <i>glasses</i>		
a <i>pound</i>		of butter

-11-

最もやっかいな問題は、「数えられるもの」か「数えられないもの」かの「判定」自体にある。可算名詞は「数えられるものを表す名詞」であり、不可算名詞は「数えられないものを表す名詞」であるといわれるが、何が数えられるものであり、何が数えられないものであるかは、われわれの「常識的判断」によって決まるのではない。例えば、「米」は、日本語を母語とする話し手にとっては、数えられる対象であるが、*rice* は不可算名詞である。「ニュース」「家具」「忠告」「情報」なども数えられなくはないものと考えられるが、英語の *news*, *furniture*, *advice*, *information* はいずれも不可算名詞である（安井 1988:138-139）。

「可算・不可算」の区別というものは、「自然界」における数えられるものと数えられないものに対応する区別ではなく、「英語という言葉」において、「数えられるものとしての扱いを受けているもの」と「数えられないものとしての扱いを受けているもの」に対応する区別である。この、「英語式論理と自然の論理との間にみられるギャップは、一つずつ、個別に学習し、埋められてゆかなければ、学習は成立しない」のかもしれない（安井 1988:140）。

その手掛かりは、不可算名詞を、「関係のある」「可算表現」といっしょに、対比して提示することにあるであろう。例えば、*travel* と *journey* は「たいへん類似した意味」をもっているが、*travel* は不可算（その意味は「旅行すること一般」）であり、*journey* は可算（その意味は「ある場所から別の場所への一つの移動」）である（Swan 1984: 78）。

(問題)

次のそれぞれの名詞は、可算名詞か／不可算名詞か。辞書で調べなさい。

1 cat	()	{ 16 knowledge	()
2 newspaper	()	{ 17 fact	()
3 water	()	{ 18 baggage	()
4 wool	()	{ 19 suitcase	()
5 weather	()	{ 20 money	()
6 health	()	{ 21 bill	()
7 house	()	{ 22 coin	()
8 air	()	23 news	()
9 advice	()	{ 24 research	()
{ 10 bread	()	{ 25 experiment	()
{ 11 roll	()	{ 26 travel	()
12 furniture	()	{ 27 journey	()
{ 13 grass	()	{ 28 trip	()
{ 14 lawn	()	{ 29 work	()
15 information	()	{ 30 job	()

名詞の選択は
(Swan 1984: 78
-79) による

-12-

(解説)

大ざっぱに言って、物質、液体、気体、抽象概念を表す名詞は、不可算名詞である。

a. 物質を表す名詞

例. wood, plastic, leather, cement, chalk, plaster, paint,
sand, coal, rock, paper

material: cloth, cotton, silk, wool, nylon

metal: iron, gold, silver, brass, lead

food: flour, rice, bread, wheat, rye, sugar, salt, pepper,

meat, fish, fruit, butter, cheese, jam

fur, skin, hair, ice, snow, rain, soil, grass, land,

ground

b. 液体を表す名詞

例. water, milk, coffee, tea, oil, gasoline, juice, alcohol

c. 気体を表す名詞

例. air, smoke, steam, oxygen, hydrogen

d. 抽象概念を表す名詞

解説は (Leech
1989: 490-491)
による

例. information, knowledge, advice, education, fiction, (outer)
space, time, power, experience, history

e. その他

例. furniture, luggage, baggage, money, pay, noise, traffic,
music, accommodation

-13-

2. 1. 1. 4 冠詞との共起関係による名詞の下位分類

名詞の特徴を析出するにあたって、とりわけ重要なのは、「名詞と冠詞の共起関係」である。冠詞には、定冠詞、不定冠詞、ゼロ冠詞（音形がゼロである冠詞）があるが、任意の名詞とこれらの冠詞との共起は、次のようになる。ただし、*印は共起不能を示す（井上和子・山田 洋・河野 武・成田 一『名詞』, 1985年, p. 415）。

定 冠 詞	*the John	the car	the milk
不定冠詞	*a John	a car	*a milk
ゼロ冠詞	John	*car	milk

このような「冠詞との共起関係」を手がかりにして、名詞を次のように下位分類することができる。まず、John の類の名詞は、基本的に、ゼロ冠詞のみを許し、不定冠詞を付加することによって John の「任意の一成員」を取り出したり、定冠詞を付加することによって John の「特定の側面」に言及したりできない。このことは、この類の名詞が「成員だけから成り、その属すべき組をもたない」ことを示している。すなわち、この類の名詞は、「個々の指示 [対象] に固有の名標」であって、「固有名詞」と呼ばれてきた。それに対して、car の類と milk の類は、それぞれ、「成員とその帰属すべき組」をもっており、「普通名詞」を形作る。このことは、定冠詞との共起によって確認できる。なぜならば、定冠詞は一般に、「特定の組に属する特定の成員に再度言及する」機能をもっているからである（井上ほか 1985: 415）。

普通名詞である car の類と milk の類とは、「可算性」に関して性質を異にする。car のような「可算名詞」は、名詞の指示対象である成員が「個の形で互いに独立して存在する」。他方、milk のような「不可算名詞」は、その表す成員は「組によって規定される連続体の断片を構成している」が、「個としての明確な輪郭を欠く」。したがって、「個を取り出す形式」である不定冠詞や複数接尾辞を取ることはできない。そのかわり、ゼロ冠詞を伴うことによって、「連続体をそのままの形で表示する」ことができる。なお、「集合名詞」（例. family）は、形式的には単数形であっても、意味的には単数・複数のいずれにもなりうる（井上ほか 1985: 415-416）。

なお、指導過程で扱う名詞は、普通名詞のみである。

(二) 冠詞と名詞の組み合わせ

「修飾語」として働く形容詞は、名詞句に現れることも現れないこともあるから、しばらくの間、無視することにして、「指定部」として働く冠詞と「主要部」として働く名詞との関係に注目しよう。

(質問)

次の語群の中で、名詞句として間違った組み合わせはどれか。

	名		詞
	可算名詞 <car>		不可算名詞 <milk>
	単数形	複数形	
the あり	ア. the car	イ. the cars	ウ. the milk
a あり	エ. a car	オ. a cars	カ. a milk
冠詞なし	キ. car	ク. cars	ケ. milk

-14-

(解説)

	名		詞
	可算名詞 <car>		不可算名詞 <milk>
	単数形	複数形	
the あり	ア. the car	イ. the cars	ウ. the milk
a あり	エ. a car	オ. ———	カ. ———
冠詞なし	キ. ———	ク. cars	ケ. milk

表は (Crystal 1988 : 113) に基づく

the の後には、可算名詞の単数形・複数形、不可算名詞のうちのどれでもが現れる (ア, イ, ウ)。

a / an の後には、可算名詞の単数形しか現れることができない(エ)。可算名詞の複数形は、a / an の後に現れることはできない(オ)。なぜならば、「一」を意味する a / an が、「二以上」を意味する複数形と合わないからである。また、不可算名詞も、a / an の後に現れることができない(カ)。なぜならば、一つ一つばらばらになっていないものと「一」を意味する a / an とが合わないからである。

冠詞なしで、可算名詞の複数形、不可算名詞が現れる (ク, ケ)。可算名詞の単数形は、冠詞なしで現れることができない(キ)。なぜなら、一つ一つばらばらになっているものを、物質・材料のようにそのままの形で、差し出すことはできないからである。

-15-

不定冠詞は「可算名詞単数形」につくのであるから、「不可算名詞」や「可算複数形名詞」が「不定 (indefinite)」の意味 (→ 2. 1. 1. 2) をもつときには、「a (n) も the もつきようがない」。このように「いかなる冠詞も現れていない」場合に、「ゼロ冠詞 (zero article) を持つ」と言う (有村・天野 1987 : 155)。

このように、可算名詞の単数形は、the の後にか a / an の後に現れる（ア、エ）。それに対して、可算名詞の複数形と不可算名詞は、the の後にか冠詞なしで現れる（イ、ク／ウ、ケ）。the car と a car との区別に対応するのは、the cars と冠詞なしの cars との区別、および、the milk と冠詞なしの milk との区別である。

こうして、名詞句を、the があるかないかによって、大きく二つに分けることができる。p. 7 で解説した、the のある名詞句と a / an のある名詞句との区別——「話し手と聞き手の共有の知識の中に入っていて、だれであるかわかる人やどれであるかわかる物などを表す名詞句」と「話し手と聞き手の共有の知識の中に入っておらず、だれだかわからない人やどれだかわからない物などを表す名詞句」との区別——は、実は、the のある名詞句と the のない名詞句との区別なのである。

		名 詞		
		可算名詞		不可算名詞
		単数形	複数形	
the あり		the car	the cars	the milk
the なし	a/anあり	a car	_____	_____
	冠詞なし	_____	cars	milk

2. 1. 1. 5 前置詞句を含む名詞句

ここでは、名詞の後の修飾語である前置詞句を含む名詞句を扱うことにする。次の文を見てみよう。

1. The girl is Mary Smith.
2. The pretty girl is Mary Smith.
3. The pretty girl in the car is Mary Smith.

これらの文は、その主語名詞句（下線を引いた部分）の主要部として、同じ名詞（girl）を含んでいる点で似ている。3の主語名詞句は、その主要部を前から修飾する形容詞（pretty）に加えて、後ろから修飾する前置詞句（in the car）も含んでいる（Quirk et al. 1985: 245）。

(オ) 名詞句の構造（続）

再び、名詞句の全体的な構造を調べてみよう。

(質問)

下の () の中の意味を持った英語の文の主語名詞句として、単語の順序の正しいものは、次の a ~ f のうちのどれか。a ~ f の中の名詞 car, girl のうちのどちらが主語名詞句の主要部として働いているかに注意しなさい。

ただし, in は、「前置詞」と呼ばれる単語の一つであって, (…の中の) という意味を持っている。

- | | |
|--------------------------------------|------------------|
| a. <u>The car in the pretty girl</u> | } is Mary Smith. |
| b. <u>In the car the pretty girl</u> | |
| c. <u>The in the car pretty girl</u> | |
| d. <u>The pretty in the car girl</u> | |
| e. <u>The pretty girl in the car</u> | |
| f. <u>In the pretty girl the car</u> | |

(車の中のかわいい女の子はメアリー・スミスだ。)

-17-

「前置詞 (preposition)」は、その名が物語るように、普通、「名詞句または他の何らかの要素『の前に置かれる』」単語である (例. of the world, by us)。「前置詞 + 名詞句」は、「前置詞句 (prepositional phrase)」を形成する (Leech 1989: 375, 374)。前置詞句は、「名詞の後の修飾語」になりうる。また、一つの前置詞句は他の前置詞句を含みうる (Leech 1989: 377)。

例えば、次の文を見てみよう。

I broke (the toy (in the box (on the table (by the wall))))

この文は、「名詞句に次々と前置詞句を『埋め込む』」ことによって作り出される。埋め込みの数に限界はなく、「無限に新しい文を作り出す」ことができる。この事実は、次の句構造規則を仮定することによって説明される。

- a. NP → (DET) N (PP)
 b. PP → P NP

上の文のような構造を生成できるのは、句構造規則の(a)と(b)が、(a)の規則の右辺に PP があり、その PP を展開する規則(b)の右辺に NP があり、その NP を展開するとまた PP が現れるというように、「繰り返し適用」されるからである (中村 捷・金子義明・菊地 朗『生成文法の基礎——原理とパラミターのアプローチ——』, 1989年, pp. 21-22)。

このように、一つの名詞句に、二つ以上の名詞が含まれていることがある。「どれが主要部であるか」を、どのようにして決定することができるだろうか。一つの方法は、「どの [名詞] が、その [文] の意味を完結するのに欠くことができないか見てみる」ことである (Crystal 1988:

91)。

(解説)

名詞句の中に、二つ以上の名詞が含まれていることがある。この(質問)の場合、car, girlという二つの名詞が含まれている。そのうちのどちらが主語名詞句の主要部として働いているかと言えば、それはgirlの方である。girlは、この文の意味を完結させるのに欠かせない。car(車)ではなくて、girl(女の子)が、この文の主語名詞句以外の部分の中のMary Smithと結び付いている。というのは、Maryは女子の名前であるから。

名詞句 the pretty girl in the car の構造を調べてみよう。この場合、in the car は、前の名詞 girl——in the car を含む主語名詞句の主要部——に後ろからかかる、修飾語として働いている。

名 詞 句				
語句の部類	冠 詞	形容詞	名 詞	[前置語句]
働 き	指定部	修飾語	主要部	修 飾 語
	the	pretty	girl	in the car

(車の中のかわいい女の子)

さらに、in the car という単語のまとまりは、in という単語と、その後に従う the car という名詞句とに分析される。in (…の中の)のように、名詞句の「前に置かれ」、一つのまとまった意味を表す単語を「前置詞」と呼ぶ。前置詞は、その後に従う名詞句とともに、「[前置詞句]」という単語のまとまりを成す。

[前置詞句]	
前置詞	名詞句
in	the car

(車の中の)

このように、名詞句が[前置詞句]を含む場合、その[前置詞句]の中にはより小さな名詞句が含まれている。

-18-

(問題)

次のそれぞれの名詞句の主要部として働いている名詞を、○で囲みなさい。また、それぞれの名詞句を、辞書を使って、日本語に訳してみなさい。ただし、下線を引いた単語は前置詞である。

- a. a map on the wall ()
- b. a ball in the box ()

- c. the boy by the tree ()
- d. the color of a rose ()
- e. the man with gray hair ()
- f. a house without a garden ()

-19-

語句の部類	名 詞 句			
	冠 詞	形容詞	名 詞	前置詞句
働 き	指定部	修飾語	主要部	修 飾 語
	the	pretty	girl	in the car
	the	pretty	girl	
	the		girl	

(問題)

{ } 内の語句を使って、名詞句をつくりなさい。ただし、ケ. については、() 内の日本語で表されるような意味を持つようにしなさい。

ア. {tall, the, tree}

→

イ. {beautiful, lady, the}

→

ウ. {music, popular}

→

エ. {child, in the bed, the}

→

オ. {on the road, the, traffic}

→

カ. {along the coast, the, weather}

→

キ. {bottles, in, milk}

→

ク. {books, on, red, table, the, the}

→

ケ. (壁のそばのテーブルの上の箱の中のおもちゃ)

{box, by, in, on, table, the, the, the, the, toy, wall}

→

-20-

2. 1. 2 代名詞が主語として働く場合

伝統文法では、代名詞を「名詞の代用形」とするのが一般的である。しかし、例えば、*the pretty young lady* という名詞句において、名詞は *lady* だけであるが、**the pretty young she / her* は不可能である。特殊な表現を除いて、代名詞が冠詞、形容詞などを伴うことはない。このことは、代名詞が「名詞句全体の代用表現」であることを示している。代名詞のこの性質を利用して、「文中の語群が代名詞で代用可能かどうか」によって、「名詞句」かどうかの判定ができる（井上ほか 1985：198-199）。「代名詞 (pronoun)」という名称は、代名詞が「名詞の代用形」と定義されるべきものであるという印象を与えやすいが、代名詞をそのように定義するのは誤りなのである（安井 稔・中村順良『代用表現』, 1984年, p. 5）。

なお、指導過程で扱う代名詞は、人称代名詞に限っている。

ここで、代名詞が名詞句の「代用表現」であるというのは、どういうことであろうか。一般に、「代用表現」を定義する特徴を知るためには、代用表現を、次の三つの観点から考察するのがよいとされる。第一は、「代用表現が内在的にもっていると思われる特質」を見る「内在的」観点であり、第二は、「代用表現の使用（解釈）を規定している文脈や実際の場面など」を見る「[指示] 語用論的」観点であり、第三は、「代用表現使用の（文体的）効果」を見る「実用的」観点である（安井・中村 1984：1）。

2. 1. 2. 1 性の区別

代用表現の第一の特徴は、「形式類を代表する特質を内在的にもつ」ことである（安井・中村 1984：3）。例えば、*he* という人称代名詞を取り上げてみよう。*he* は、「名詞句 (NP)」という特質を内在的にもっているから、「文中の名詞句が生じうる位置」に生じることができ、そのほかの位置に生じることとはできない。*he* は、「単数 (singular)」という特質を内在的にもっているから、「[文の] 主語の位置」を占める場合には、その文の「述語動詞」との間に「数の一致」を要求する。*he* は、「男性 (male)」という特質を内在的にもっているから、*pregnant*, *widow*, *spinster* のような、「女性 (female)」という特質を内在的にもっている単語と共起することはできない（安井・中村 1984：1-2）。名詞句の代用形は、「主要部」の「性・数」によって決定される。次の文を見てみよう。

1. The girl is Mary Smith.
2. The pretty girl is Mary Smith.
3. The pretty girl in the car is Mary Smith.
4. She is Mary Smith.

1. ~ 3. の文の主語として働いている「[名詞句] 全体の基本的な文法的性質」は、「主要部の名詞 *girl* の文法的性質」として捉えることができる。上の例では、主要部が *girl* という「女性・単数」名詞であるから、代用形は、4. におけるように、*she* でなければならない（井上ほか 1985：58）。

(ア)では、三人称単数の代名詞 *he*, *she*, *it* の間での性の区別を取り扱う。

(2) 代名詞が主語として働く場合

(ア) 性の区別

(質問)

次の文の主語名詞句（下線を引いた部分）を、代名詞 *he / she / it* のうちのどれかで置き換えて、文法的に正しい文をつくりなさい。

The pretty girl in the car is Mary Smith.
→ _____ is Mary Smith.
-21-

(解説)

代名詞 *he / she / it* には、「男性」(*he*)、「女性」(*she*)、「中性」(*it*)という性の区別がある。典型的には、*he* は男について、*she* は女について、*it* は事物について用いられる。

(質問) の文の主語名詞句を、代名詞 *he / she / it* のうちのどれで置き換えるかは、主要部の名詞によって決まる。この文の主語名詞句の主要部は、形容詞 *pretty* が前から修飾し、前置詞句 *in the car* が後ろから修飾している、*girl* (女の子) という名詞である。したがって、主語名詞句は、次のように、代名詞 *she* によって置き換えられる。

The pretty girl in the car is Mary Smith.
→ She is Mary Smith.

このように、代名詞は、単独で主語になることができる。このことは、代名詞が、「名詞の代わり」というよりは、冠詞や、形容詞・前置詞句を含めた「名詞句全体の代わり」であることを示している。代名詞のこのような性質を利用して、文中の語群が代名詞で置き換えられるかどうかによって、その語群が「名詞句」かどうか判定することができる。

-22-

代用表現の特徴の一つとして、「実際的・実用的有用性」という観点から、「経済・安全・正確」の三点が挙げられる。この、実際的・実用的観点からの特徴は、「重複(反復・繰り返しの回避) (avoidance of repetition) と捉えられていることがある(安井・中村 1984: 5-6)。*he*, *she*, *it*, *they* のような人称代名詞は、「完全な名詞句の反復が不必要である」とときにはいつでも、用いられる(Wekker and Haegeman 1985: 38)。

代用表現のもう一つの特徴は、「文脈や実際の場面にに基づく情報に依存する」ことである(安井・中村 1984: 3)。人称代名詞は、もっぱら「同一物指示」を職能とする単語、すなわち、「その

〔単〕語自体で意味解釈を完結させる」のではなく、「その意味解釈のために何か他の要素を参照することを要するように、はじめから、仕組まれてある〔単〕語」の類に属する代用表現である（安井・中村 1984：18-19）。要するに、人称代名詞は、「テキスト内の他の要素（先行詞）」を参照しつつ、「自らの指示を同定する」単語の類である。「先行詞の指示対象と全く同一の個体」を、「自らの指示対象として同定する」という点に、人称代名詞の基本的な特徴がある（安井・中村 1984：22-23）。したがって、「人称代名詞が指す」のは、「先行詞」ではなく、「先行詞によって指し示されるもの」である（安井・中村 1984：21）。

典型的には、*he* は「男性」について、*she* は「女性」について、*it* は「その他の場合」に、用いられるが、この説明には、「いくつかの修正」を加えなければならない。第一に、*it* は、「オスまたはメスの動物」や「人間の乳幼児」を表すのに用いられうる。この場合、*it* と、*he* または *she* との間の選択を決定するのは、「指示対象の特性」というよりはむしろ、「〔指示対象に対する〕話し手の態度」である。例えば、「自分の赤ん坊またはペット」を表すのに、*it* は用いないだろう。*he/she* は、話し手が、指示対象を「人格（*personality*）を持っている」ものと見なしていることを暗示するのに対して、*it* は、話し手を指示対象からもっと遠ざける（Rodney Huddleston, *Introduction to the Grammar of English* (1984), pp. 289-290）。

代名詞は、同じ名詞句を繰り返さなければならないときに、繰り返される「名詞句の代わり」として用いられる。

The king is in the garden. He stops and looks back. Here comes the queen. She is with a white animal. It is a dog.

例は（安井 1982：7）による

（王は庭にいる。彼は立ち止まって、振り返って見る。このとき王妃がやってくる。彼女は白い動物を連れている。それは犬である。）

このように、代名詞は、前の名詞句と同じものを指し示している。これを、「代名詞が名詞句を受ける」という。名詞句を受ける代名詞は、その名詞句の主要部である名詞によって決まる。

（質問）

次の名詞を主要部とする名詞句は、代名詞 *he/she/it* のうちのどれで受けるか。ただし、一つに決まらないものについては、可能性のあるものを全部あげなさい。

- ア. *ant* ()
- イ. *baby* ()
- ウ. *box* ()
- エ. *brother* ()
- オ. *bull* ()
- カ. *cow* ()
- キ. *doctor* ()

名詞の選択は
（Quirk et al. 1985：314）による

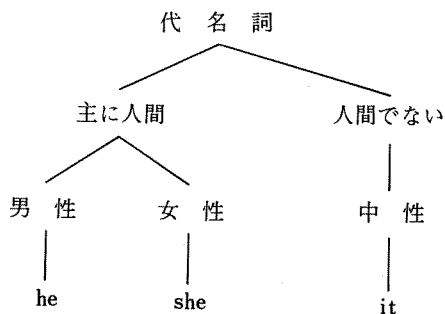
ク. sister ()

-23-

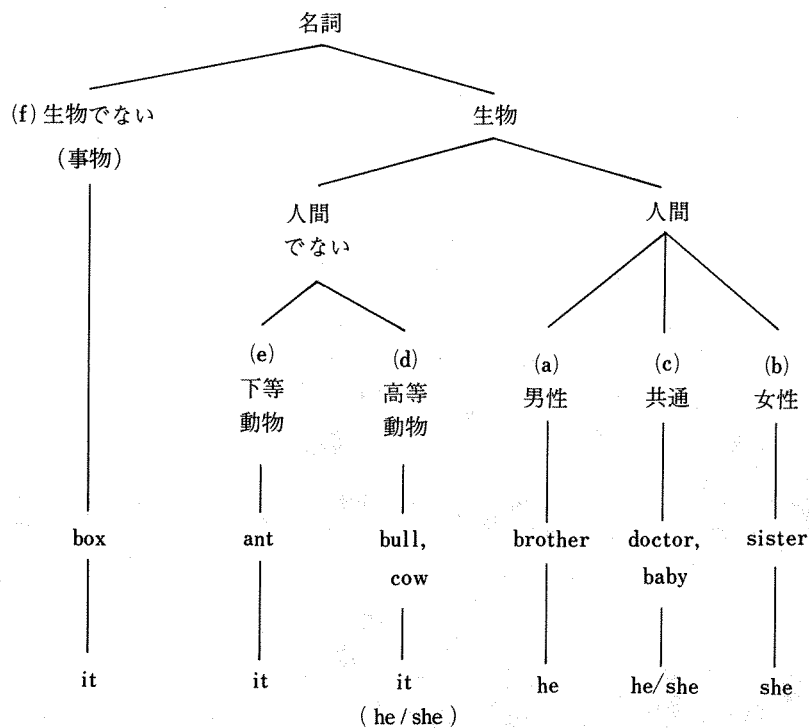
(解説)

代名詞 he / she / it が、それぞれ、どんなものを指し示す名詞句を受け
るか整理すると、次のようになる。

解説は (Quirk et
al. 1985 : 314 -
317) に基づく



逆に、名詞は、その名詞が主要部として働く名詞句が、代名詞 he / she / it のうちのどれによって受けられるかによって、次のように分類される。



-24-

(a) 男性名詞, (b) 女性名詞

例.	男性名詞	女性名詞	男性名詞	女性名詞
	boy	~ girl	prince	~ princess
	brother	~ sister	waiter	~ waitress
	father	~ mother	hero	~ heroine
	king	~ queen	bridegroom	~ bride
	man	~ woman	widower	~ widow
	uncle	~ aunt		

(c) 男性・女性共通の名詞

この部類の名詞が主要部として働く名詞句は、男性を指し示すこともあるし、女性を指し示すこともある。名詞句によって指し示される人が男性であるとわかっているならば、**he** で受け、女性であるとわかっているならば、**she** で受ける。その人が男性である可能性も女性である可能性もあるならば、**he or she** で受ける。

例.	artist	cook	doctor	librarian
	novelist	professor	servant	singer
	student	teacher	typist	writer

ただし、人間の乳幼児を表す名詞 (**baby**, **child**, **infant**) については、**he / she** のほかに、**it** が用いられることがある。親が自分の赤ん坊・子どものことをいう場合のように性別が意識されていれば、**he** と **she** のうちのどちらかで受け、**it** は用いないだろう。**it** を用いるのは、その赤ん坊・子どもの性別が不明であるときか、性別が問題にならないときである。

(d) 高等動物

一般には、**it** が用いられる。**he / she** を用いると、話し手が、その動物に特別の関心があり、その動物が、人間と同じように、人格を持っていると見ていることを示す。**he / she** が用いられそうな動物は、人間が親密なつながりを持っている動物（特に、飼いならした動物＝家畜・ペット）である。

例. オス・メス共通

cat

monkey

rabbit

オス

bull

cock

lion

メス

cow

hen

lioness

(e) 下等動物, (f) 事物
常に it。

例. 下等動物

ant

beetle

butterfly

frog

herring

snake

spider

事物

box

car

idea

2. 1. 2. 2 人称の区別

人称代名詞 (I, you や, he, she その他の単語) は, 「文法的・意味的な [閉じた] 体系」を成す。人称代名詞の体系は, 基本的に, 大きく, 「二つの小体系」に分割される。一つは, 「対話の当事者」である, 「話し手」の I, 「聞き手」の you, および, 話し手を (ときには聞き手をも) 含む we から成る小体系であり, もう一つは, それ以外の単語から成る小体系である。言語活動が, その基本的な様態において, 「伝達の過程」であるとする, 「その過程を支えている当事者」である「話し手と聞き手」は, 「その過程にかかわってくるその他のもの」からは分離される。人称代名詞の I と you は, 「対話の基本的な担い手」である話し手と聞き手を指示する単語であって, 本質的に, 「テキスト外のもの」を指示する, すなわち, 「外界照応」の単語である (we もそうである)。それに対して, その他の, 「三人称の代名詞」は, 本質的に, 「テキスト内照応」のものである (安井・中村 1984: 41)。

(イ)では, 単数の人称代名詞の間での人称の区別を取り扱う。

(イ) 人称の区別

代名詞 he / she / it は, 「名詞句の代わり」として用いられ, 前に出てきた名詞句と同じものを指し示す, ということを p. 23 で学んだ。

英語には, he / she / it とは違って, 何かの「名詞句の代わり」として用いられているわけではないのに, he / she / it と同じように, 「代名詞」と呼ばれている単語がある。それは, [I] と [you] である。

he / she / it は, 人・物を指し示すといっても, 前に出てきた名詞句を経

由して指し示すのであって、指し示し方は間接的である。これらの代名詞は、「名詞句の代わり」であって、その名詞句と結びついてはじめて、人・物を指し示すのである。

ところが、[I] / [you] は、「名詞句の代わり」ではなくて、直接的に、その場にいる人を指し示す。[I] は話し手を、[you] は聞き手を直接的に指し示す。

たとえば、Tom Smith が Sue Jones に話しかけているならば、[I] は Tom Smith を、[you] は Sue Jones を指し示す。逆に、Sue Jones が Tom Smith に話しかけているならば、[I] は Sue Jones を、[you] は Tom Smith を指し示す。

-27-

一般に、「人称代名詞 (personal pronoun)」は、「人称というカテゴリーが適合する最も基礎的な部類の代名詞」である。「人称 (person)」は、項が、「発話行為における指示対象の役割」によって区別されるカテゴリーである。特徴的には、1 人称形式は「話し手／聞き手 (を含む集団)」を、2 人称形式は「受け手 (を含む集団)」を、3 人称形式は「発話行為の非参加者」を指し示すのに用いられる。英語では、1 人称は、単に、I (または we) であり、2 人称は you であり、3 人称は他の代名詞である (Huddleston 1988: 97)。また、名詞句は、つねに、3 人称である (Leech 1989: 352)。

代名詞 I / you / he / she / it を、特に、「[人称] 代名詞」と呼ぶことがある。[人称] 代名詞は、[人称] によって、用いられるものが異なる。

[人称] は、話し手を基準にして、コミュニケーションにおける人・物の役割によって区別される。

[人称]	{	[一人称] : 話し手 (代名詞 I)
		[二人称] : 話し相手＝聞き手 (代名詞 you)
		[三人称] : 第三者＝その他 (代名詞 he / she / it, [名詞句])

[人称] は、一人称・二人称と、三人称とに大きく分けられる。一人称・二人称は、I / you という特定の代名詞に限られている。それに対して、三人称として扱われるものは、代名詞 he / she / it のほかに、すべての [名詞句] が含まれる。

-28-

2. 1. 2. 3 数の区別

(ウ)では、人称代名詞の間での数の区別を扱う。ここで、英語の人称代名詞の体系が完結する。

3人称では、単数では、「he, she, itの間での分化」があるが、複数では、theyしかない。theyは、「その個々の成員が、相異なった単数の代名詞という手段によって指し示されるであろう集団」に適合しうる (Huddleston 1984: 289)。

(ウ) 数の区別

名詞句はすべて [三] 人称の代名詞で受ける。名詞句の主要部として働く名詞が数えられる名詞である場合、名詞句にも単数と複数の区別がある。主要部が名詞の単数形である場合、名詞句は [単数] であって、一人の人／一つの物を指し示す。主要部が名詞の複数形である場合、名詞句は [複数] であって、二人以上の人／二つ以上の物を指し示す。

[三] 人称の代名詞は、受ける名詞句の数によって、用いられるものが異なる。単数の名詞句は、性の区別によって、he / she / itのうちのどれかで受ける。複数の名詞句はすべて、性の区別なしに、[they] で受ける。

単 数		複 数	
代名詞	名詞句	代名詞	名詞句
he			
she	主要部が [単数] 形	[they]	主要部が [複数] 形
it			

(質問)

次の名詞句は、どの代名詞で受けるか。

1. the new car ()
2. the boy in the car ()
3. the girl in the car ()
4. the boys in the car ()
5. the girls in the car ()
6. the classic cars ()
7. the boy and the girl in the car ()

意味的には、1人称代名詞の we の I との対立は、例えば、名詞の books の book との対立と同じではない。books は、「二つ以上の本を含む集合」を表すのに用いられるが、we の意味は、「二人以上の話し手／書き手」ではない。むしろ、それは、「少なくともそのうちの一人が、話し手／書き手である二人以上の個人の集団」に適用される。たいてい、それは、「単一の話し手／書き手プラス一人以上の他の人から成る集団」(例. 私とあなた、私と彼／彼女、私と彼(女)ら)を表すのに用いられる (Huddleston 1984: 288-289)。

1人称、2人称、3人称の「順序づけ」は、「話し手／書き手の、受け手に対する」、「受け手の、非参加者に対する」、「優先」を反映している。「話し手／書き手＋受け手かつ／または一人以上の非参加者から成る集団」は、1人称の we によって、「受け手＋非参加者から成る集団」は、

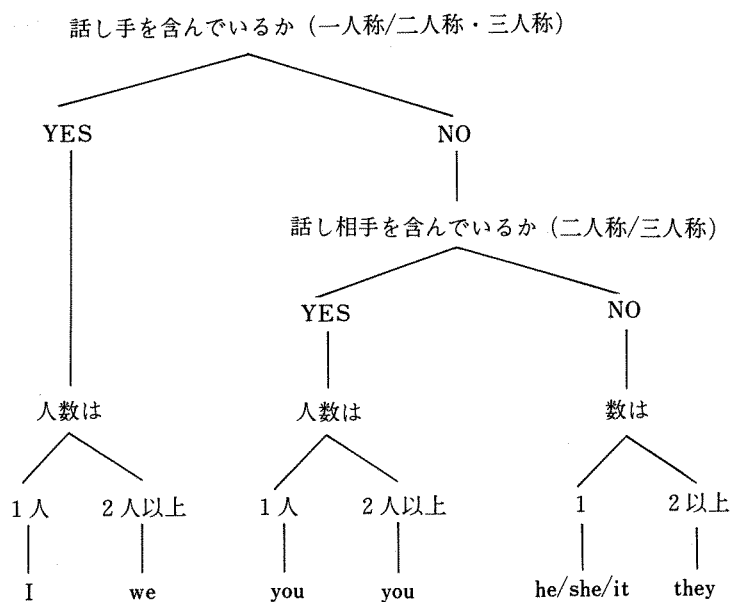
2人称の *you* によって、指し示されるだろう (Huddleston 1988: 97)。

三人称だけでなく、一人称・二人称にも、単数と複数の区別がある。代名詞を、人称・数によって分類すると、次のようになる。

人 称		数	単 数	複 数
一人称			I	[we]
二人称			you	[you]
三人称	男 性		he	they
	女 性		she	
	中 性		it	

ただし、意味の上では、一人称・二人称の数の区別は、三人称の数の区別と同じではない。たとえば、I に対応する複数の代名詞 [we] は、たいてい、‘二人以上の話し手’ではなくて、‘一人の話し手を含む二人以上の人’、つまり、‘一人の話し手+その他の人’を意味する。

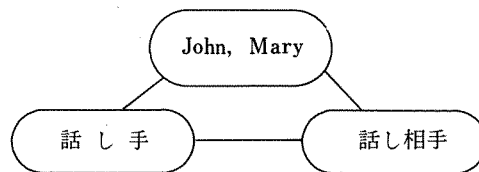
結局、代名詞の使い分けは、次のようになる。



(問題)

次の人たちから成る集団は、どの代名詞で指し示されるか。

1. 話し手+話し相手
2. John + Mary
3. 話し手+ John
4. 話し相手+ Mary
5. 話し手+話し相手+ John + Mary



-31-

2. 2 主語の位置

p. 32では、主語名詞句と動詞句とを組み合わせ、統語論的・意味論的に適格な文を構成する問題(安井 稔『英文法総覧』, 1982年, p. 8)に、生徒を取り組ませる。

2. 主語の位置

英語の文には、主語が必ず備わっている。英語の主語は、文に欠かせない要素であって、通例、省略されない。

[主語の定義]

英語の主語は、次のような特徴を持っている。

- (a) 主語の役割は、「名詞句」または「代名詞」がつとめる。
- (b) 主語の普通の位置は、動詞の前である。

要するに、主語は、「動詞の前に位置する名詞句または代名詞」と定義される。

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{名詞句} \\ \text{代名詞} \end{array} \right\} + \text{動詞} + \dots$$
 (主 語)

(問題)

左欄の(1)~(5)を主語とする文を、右欄の(a)~(e)と組み合わせでつくりなさい。意味を成す文をつくるように注意しなさい。

- | | |
|--------------|---------------------------|
| (1) Roses | (a) are long in June. |
| (2) Snow | (b) bloom in May. |
| (3) The days | (c) blows in March. |
| (4) The sky | (d) falls in January. |
| (5) Wind | (e) is blue in September. |

-32-

pp. 33-34の問題は、文の主語を認定させる問題である。A. の主語名詞句は、前置詞句を含まないもので、B. の主語名詞句は、前置詞句を含むものである。

(問題)

動詞に注意しながら、次の各文の主語に下線を引きなさい。主語が名詞句であるならば、さらに、主要部の名詞を○で囲みなさい。主語が代名詞であるならば、下線を引くだけでよい。

A.

1. A car appeared at the top of the hill.
2. Heavy rain fell all day.
3. I like snails.
4. The fresh snow looks beautiful on the hill.
5. The man kicked the coke machine violently.
6. The train was late.
7. They shared a large pizza.
8. We talked till midnight.

-33-

B.

9. Stories about travel and adventure are interesting for children.
10. The child in the bed was a boy.
11. The desk by the wall moved.
12. The lamp on the table went out.
13. The right man for the job is John.
14. The traffic on the road was very heavy.

15. The weather in the mountains changes quite often.

16. The woman with the child is Joan.

-34-

3. 今後の課題

今後取り組むべき課題として、現在の教授プログラムの「1. 主語の内部構造」の部分で、「名詞句・代名詞とその指示」を教育内容とする、単独の新しい教授プログラムにつくりかえ、その中で可能な限りにおいて、名詞句・代名詞で文の主語という文法的機能を持ったものを取り扱うことにする。文法教育の領域に属するものとして、名詞句・代名詞の指示語用論をも取り込んだ教授プログラムを作成するのである〔ここで、「指示語用論」(referential pragmatics) というのは、「与えられた発話における指示的表現への、指示(reference)の付与」のことである(Geoffrey N. Leech, *Principles of Pragmatics*, 1983, p. 11 [邦訳, p. 16])〕。

教授プログラムのつくりかえのための基本的視点は、安井 稔『新しい聞き手の文法』(1978年)に基づくことにする。文の主語は、「談話の流れ」の中で、「特別な役割」を果たしている。その「特別な役割」が何であるかということは、「二つの面」に分けて考えることができる。一つは、「主語がその文の中で果たしている役割」であり、もう一つは、「主語が、その文を越えた談話の中で果たしている役割」である(安井 1978: 31)。ここでは、主語がその文の中で果たしている役割を見てみよう。

3. 1 文のテーマとしての主語

「文法的主語」は、「話題化変形(topicalization)」などが行われていない限り、「文頭の名詞句」である(安井 1978: 36)。

「言語による伝達行為における最も基本的な、そして、おそらく万国共通であると考えられる型」は、「何かについて」「何かを述べる」というものであろう(安井 1978: 39)。

次の文の対を比較してみよう。

- (1) a. John arrived before Peter.
b. Peter arrived after John.
- (2) a. John borrowed £5 from Peter.
b. Peter lent £5 to John.
- (3) a. John sent Peter a telegram.
b. Peter received a telegram from John.

「現実の内容」に関する限り、それぞれの対の文は、「同一の[メッセージ]」を伝達している。もっとも、a. の文とb. の文は、「問題になっている[事態]」を「相異なった角度」から見ているという点で、異なる。すなわち、a. の文は、John 「についてである」と了解されるのに対して、b. の文は、Peter 「についてである」と了解される。話し手は、「文法的に主語とし

て機能している要素の選択」を通して、「コミュニケーションの出発点」を告知するのである。この構造化は、上の例では、「語彙目録」を通して、「特定の語彙項目を用いること（before / after ; borrow / lend ; send / receive）」によって、達成されている（Jan A. van Ek and Nico J. Robot, *The Student's Grammar of English* (1984), pp. 241-242）。

英語の主語は、外に特別の理由がない限り、「…について」に当たる部分を表す（安井 1978 : 41）。英語では、「どういう並べ方であるにせよ、なんらかの線形的順序をとらない限り、ものは言えない」という「言語の不可避的現象」に、「固定した語順を、その文の論理的な命題内容に結びつける」という文法的な仕事をさせている。これとは別に、英語では、「文頭という位置」に、「…について」ということを表す仕事をさせている。この位置は、典型的に、「主語がはいることになっている位置」である。つまり、英語における「主語に固有の、基本的な役割」は、『…について』に当たることを表すことである（安井 1978 : 42-43）。

「…について」を表す部分は、その文の「テーマ」とでも言うものであって、「話し手が聞き手に与える、その文のオリエンテーションに関する手掛かり」というぐらいのものである（安井 1978 : 47）。文頭の位置というのは、話し手が、「私が今話し始めようとしているのは、宇宙万物の中のこの方面の、この部分に関するものである」というように、「話題に関して、ある種の限定、指定、方向づけを行うもの」である。この、「テーマづけ（thematization）」とでもいうことは、「それぞれの文の内部」だけで決めることができる（安井 1978 : 48）。文のテーマづけは、英語では、文頭の要素が担うべきものであって、この文頭の要素は、主語であるのが最も通常の場合である（安井 1978 : 135）。

話し手は、「森万万象の何について話しを始めること」もできる（安井 1978 : 48）。「何かについて」の部分は、「固有名詞」であることも、「人称代名詞」であることも、「定冠詞を伴った名詞表現」であることも、「総称的（generic）な名詞 [句]」であることもあるし、「特定の（specific）な名詞表現」であることもある。要するに、「話者に、それとわかっているもの」や、「話者と聴者とにそれとわかっていると話者が考えているもの」などが、その中に含まれる（安井 稔『英語学の世界』, 1974年, p. 46）。

3. 2 既知項目と定名詞句表現

主語は、「既知項目」を表すものであることが望ましい。主語は、「定（definite）であるとされる表現」である場合、または、「総称的（generic）」である場合、既知項目を示している（安井 1978 : 196）。

「定名詞句表現」というのは、「the を伴った名詞 [句]」だけでなく、「人称代名詞」（he, she, you, they など）や、「直示的（deictic）な表現」（this, that など）、さらには、「所有格を伴う表現」（my problem, John's proposal など）をも含む。定名詞句表現が用いられるのは、「その表現によって指し示されるもの（の唯一性）が聞き手にも分かっていると話し手が考えている」場合である（安井 1978 : 196-197）。

次の（4 a）と（4 b）とを比較してみよう。

- (4) a. Don't go now ; the train's coming.
- b. Don't go now ; a train's coming.

二つの例の違いは、主語名詞句に含まれている冠詞が、「定冠詞であるか、不定冠詞であるか」という点だけである。定冠詞が用いられているならば、「聞き手にも分かっている（あるいは、分かる）はずの列車」（例. 聞き手（あるいは、聞き手と話し手）が乗る予定にしている列車）を指すことになるのに対して、不定冠詞が用いられていると、「少なくとも、聞き手には分かっているもの」（例. 話し手にはわかっているが、聞き手の方は気のついていない列車の進行、接近）を示すことになる（安井 1978：197-198）。

指示対象が聞き手にもわかっているという判定を下す際、話し手が「よりどころ」とすることができるのは、「文脈」と「場面」とである。文脈は、さらに、「先行する文脈」と「後に続く文脈」とに分かれる。「先行する文脈に依存している」場合は「前方照応的（*anaphoric*）」、「後に続く文脈に依存している」場合は「後方照応的（*cataphoric*）」、「外界の場面に依存している」場合は「外界照応的（*exophoric*）」と呼ばれる（安井 1978：197）。

定名詞句表現における *the* の機能は、「場面または文脈を見てください。外ならぬあるものを示そうとしているものであることが分かるはずです。」という合図をする点にある（安井 1978：205）。ただし、定冠詞 *the* は、「外ならぬものあり。場面、文脈を見よ。」という「目印」はもっているにしても、「外ならぬ何か、実際に、何であるか」を突き止めるのに、何の働きもしない。「外ならぬ何か」を実際に探すという作業は、すべて、「聞き手の側における協力」にゆだねられているのである（安井 1978：206）。

3. 2. 1 外界照応用法

「[直接的] 場面（*immediate situation*）」用法では、定冠詞は、「会話の[直接的] 場面」に存在しており、その場面から、話し手と聞き手の共通の認識を得ることができるものに言及する。

- (5) a. Pass me *the bucket*, please.
- b. Don't go in there, chum. *The dog* will bite you.
- c. Beware of *the dog*.

定冠詞づきの名詞句の指示対象は、話し手と聞き手の両方に見えていることがある（例（5 a））。また、指示対象は、聞き手には見えていないこともある（例（5 b））。さらに、張り紙などの警告では、指示対象はだれにも見えていなくてもよい（例（5 c））。それに対して、「指示[詞]」（*demonstrative*）の *this / these*, *that / those* は、「話し手と聞き手の両方に指示[対象]が見えている」場合に用いられる（有村・天野 1987：153-154）。

- (6) Don't go in there, chum. *This (or That) dog* will bite you.

「[広範] 場面」用法では、定冠詞は、「文脈や会話の場面」より「もっと広い生活の場や共通の文化」から、共通の認識が得られるものに言及する。

- (7) *the church, the pub, the town hall, the village green, the local councillors* [同じ村や町]
- (8) *the Queen, the Prime Minister, the navy, the members of parliament* [同じ国]

- (9) the moon, the sun, the planets, the North Pole, the Equator, the Renaissance, the Greek gods, the universe, the earth [同じ地球]

このように「共通の基盤」が広がっていくにつれて、[広範] 場面は、「一般的知識や常識」に近くなっていく（有村・天野 1987:154）。

3. 2. 2 前方照応用法

定冠詞の「前方照応的 (anaphoric)」用法では、「前出の不定名詞句」によって話し手と聞き手の共通認識となっているものに、定冠詞づきの名詞句で言及する。

- (10) Fred was discussing *an interesting book* in his class. I went to discuss *the book* with him afterwards.

このように、前出の不定名詞句の指示対象と同じものを表す名詞ではなく、「その指示 [対象] の一部を表す名詞」[のように、その指示対象に何らかの意味で関連があるものを表す名詞] に定冠詞がつく場合もある（有村・天野 1987:152）。

- (11) a. John bought *a bicycle*, but when he rode it one of *the wheels* came out.
b. The man drove past our house in *a car*. *The exhaust fumes* were terrible.

前方照応用法の定冠詞や代名詞が「受ける」ものは何だろうか。例えば、次の(12)における代名詞 *it* は、何を受けているか。

- (12) Mary received a new book. It is about semantics.

この *it* は、確かに、*a new book* を受けている。それならば、(12)は次のように書き換えることができるであろうか。

- (13) Mary received a new book. A new book is about semantics.

(13)はまともな文ではない。二番目の *a new book* は、少なくとも、*the new book* でなければならない。この場合、*the new book* とは、*the new book which Mary received* ということである。つまり、(12)における *it* は、*a new book* ならば何でも受けているのではなく、「メアリーが受け取った [新しい] 本」(*the new book which Mary received*) という「特定のもの」を受けているのである（安井 1978:198-199）。

3. 2. 3 後方照応用法

「後方照応的 (cataphoric)」用法では、定冠詞は、「後に現れる要素」に動機づけられて用いられる。ただし、それは、代名詞の場合とは違って、後に現れる名詞句と同一の指示対象ではなく、名詞に後続する「前置詞句、関係詞節、分詞 [節] などの修飾要素」によって唯一的に限

定できるものに言及する（有村・天野 1987:152-153）。

- (14) a. *The President of Mexico is to visit China.*
 b. *The girls sitting over there are my cousins.*
 c. *The wines that France produces are among the best in the world.*

3. 3 不定名詞句の指示の特定性

3. 3. 1 不定名詞句と定名詞句表現の同一指示性

先行する、「不定冠詞を伴っている名詞句」を「定名詞句表現で受ける」ことは、通常は可能であるが、一定の、特別な場合には不可能である。その「特別な場合」というのは、「その不定冠詞を伴った名詞句によって指し示されるものが、その文の発話時に、この現実界に存在していない」ことが明らかである場合 [= その不定名詞句が、具体的に解釈される場合] である（安井 1978:201）[「特定の（specific）」というの、「話し手が特定の指示 [対象] を意図している場合」、名詞句について用いられる用語] であって、特定性は、「聞き手」にとってというよりはむしろ、「話し手」にとっての特定性である（安井 1978:5）。例えば、次の(15)における定名詞句表現の使用は、非文法的である。

- (15) *Mary wanted to have a baby. *The baby's name was Jane.*

この場合、話し手が、*a baby* によって指し示される対象を、「これがそれです。」と言えるような形で持ち合わせていることは、ありえない。ただし、(15)のような例は、むしろ、例外的である。一般には、「非特定の（non-specific）な解釈」が可能であるならば、「特定の（specific）な解釈」も可能であるが、非特定の解釈のほうが優先する場合がある、というのが通例である。例えば、(16)の後に、(17a) のように続けることも、(17b) のように続けることも、ともに可能である。

- (16) *John asked me for a newspaper.*
 (17) a. ... and I will send one to him.
 b. ... and I will send it to him.

(17a) におけるように、*one* が用いられれば、「指示 [対象] の同一性は意図されていない」ことになるので、先行する *a newspaper* は非特定のであってさしつかえないが、(17b) におけるように、*it* が用いられれば、「指示 [対象] の同一性が意図されている」ことになるので、*a newspaper* は特定のでなければならない（安井 1978:201-202）。

3. 3. 2 不定名詞句の特定性

このように、「文中における不定名詞句の指示作用」は、一つに定まらないことがある。例えば、次の(18)における不定名詞句 *a fish* は、その「特定性（specificity）」に関して、二通りの解釈が可能である。

- (18) *John wants to catch a fish.*

「特定のな解釈」では、「ジョンが捕えたがっている特定の魚が現実世界に存在する」ことを含意する。「非特定のな解釈」では、そういう含意はない(安井 稔(編)『例解現代英文法事典』, 1987年, p. 632)。

不定名詞句が、(18)におけるように、その特定性の解釈に関して両義的となり、非特定のな解釈が可能となるのは、不定名詞句が、「不確実性」(uncertainty)を表す意味要素(「非実現」(unrealized), 「未来」(future), 「可能」(possible), 「否定」(negation)などの意味要素)[=「法演算子」(modal operator)]の「作用域内」にある場合である。不定名詞句は、「法演算子を含む語彙の作用域内にあって、その法演算子に依存している」場合には、非特定のな解釈を与えられ、「法演算子に依存しない」場合には、特定のな解釈を与えられる。「法演算子の作用域の外にある」不定名詞句は、法演算子に依存せず、特定のな解釈を与えられる。法演算子を含んだ語彙の作用域というのは、意味的には、文中で「法演算子によって規定された不確定的な状況(実現していない状況、未来の状況、可能な状況、存在しない状況など)」を述べた部分である。法演算子を含んだ語彙の作用域内にある不定名詞句の特定性に関する解釈としては、一般に、非特定のな解釈の方が優先し、その優先の度合いも法演算子によって異なるが、次の文における不定名詞句は、すべて、特定のとも非特定のとも解釈することができる(安井(編) 1987: 632-633)。

- (19) John *will* bring a girl to the party.
- (20) It is *possible* that John caught a fish.
- (21) Bill *didn't* see a misprint.

(18)~(21)における不定名詞句は、すべて、法演算子を含む語彙の作用域内にある。この場合、不定名詞句は、随意的に法演算子に依存する。(18)では、動詞 *want* が法演算子「非実現」を、(19)では、助動詞 *will* が法演算子「未来」を、(20)では、形容詞 *possible* が法演算子「可能」を、(21)では、否定辞 *not* が法演算子「否定」を、それぞれ含んでいる。*want* の作用域は、その補文であり、*will* の作用域は、それを含む文全体であり、*not* の作用域は、それを含む文中でそれよりも右側にある部分である。また、*it is possible that ...* における *possible* の作用域は、*that* 節全体である。法演算子に依存した不定名詞句は、一定の法条件に従い、非特定のな解釈を与えられる。(18)の a fish, (19)の a girl, (20)の a fish, (21)の a misprint は、それぞれ、(i)認知可能な指示対象は、ジョンの願望の対象となっている状況が実現した場合にのみ存在する、(ii)認知可能な指示対象は、現在のところ存在していないが、将来、存在することになる、(iii)認知可能な指示対象の存在が可能である、(iv)認知可能な指示対象は存在しない、という解釈を受ける。他方、法演算子に依存しない不定名詞句は、法条件に従わず、特定のな解釈を与えられる(安井(編) 1987: 633-634)。

なお、定名詞句表現における *the* が合図する「外ならぬあるもの」は、常に「識別可能な [= 認知可能な] 特定個体」であるとは限らない。例えば、次のような場合、「これが、正に、その人です」といって指し示しうる特定個体は存在しない(安井 1978: 205)。

- (22) John wants to meet the girl of his dreams.

3. 4 総称的名詞句

「総称」的な名詞句とは、「陳述の対象が(一定数の)個または(一定量の)物質の範囲を越

えて類全体に及ぶもの」である。

- (23) a. A beaver builds a dam.
 b. Beavers build dams.
 c. The beaver builds a dam.
 d. Oil floats on water.

これらの文は、「任意に選ばれた一匹または数匹のビーバーについての陳述」あるいは「特定のビーバーについての陳述」でもない。また、「任意に取り出された油についての陳述」でもない。上の文は、ビーバーあるいは油という「類についての一般的な陳述」なのである（井上ほか 1985：456）。

総称用法の名詞句は、「…というものは」という意味を表し、通例、「すべての人がすでに承知しているもの」という既知項目を指し示すものである。

- (24) A pterodactyl is an extinct winged reptile.

この場合、a pterodactyl は総称用法の不定名詞句であるが、すべての人が pterodactyl（翼竜）という単語を知っているとは限らないであろう。「すべての人が知っているとは限らないものであっても知っているかの如くに扱うもの」は、(24)におけるように、総称用法で用いることができる（安井 1987：207）のである。

3. 4. 1 総称名詞句の形式

総称を帯びる要素は、「固有の文法形式」をもたず、外見上、非総称の文の形と区別がつかない。例えば、上の(23)の総称的主語は、それぞれ、次の文の非総称的主語と形式上同じである（井上ほか 1985：456-457）。

- (25) a. A beaver is building the dam.
 b. Beavers are building the dams.
 c. The beaver is building the dam.
 d. Oil is floating on the water.

総称用法は、「総称用法に特有の形」をもっていない、「宿り木的使用法」である。したがって、「やどぬしとも言ふべき非総称用法の〔名詞句〕から全く切り離された別個のもの」として、総称用法の名詞句を扱おうとすれば、どうして両者が同じ形をとっているのか説明できなくなる（安井 1978：218）。総称用法は、「非総称的使用法から、派生的に得られる」ものである（安井 1978：224）。

ある与えられた名詞句の用法が総称用法であるかないかということは、名詞句を見ているだけでは、見分けられない。

(26) The elephant likes peanuts.

この文の主語は、「外の種族ならぬ象という種族は」という総称的な意味であることも、「外ならぬその象は」という非総称的な意味であることも、ほとんど同等に可能である。ただし、総称用法と非総称用法という二通りにあいまいな名詞句の読みのうち、より基本的なものであるのは、非総称用法のものである。

(27) The elephant stepped on my car.

この文は、非総称的な解釈は許容するが、総称的な解釈は許容しない。これに対して、(26)のような文においては、総称用法の読みがより普通の読みであるにしても、非総称用法の読みが不可能であるわけではない。総称的な名詞句を含む文は、理論的には、非総称的な読みをも許容するが、非総称的な名詞句を含む文は、総称的な読みを許容するとは限らない。ということは、非総称用法の名詞句を含む文に、「一定の文脈的特性」が加わっている場合に、その非総称用法の名詞句は、総称用法としての働きをも担いうるものになるのである（安井 1978：216-218）。

ただし、不定冠詞を伴った名詞句の場合、総称用法の解釈のみが可能であるという文が、ないわけではない。

(28) An elephant likes peanuts.

けれども、次のように、総称用法と非総称用法とが見られる場合も少なくない。

(29) A bird sings songs.

特に、定冠詞を伴った名詞句の場合であれば、総称的解釈のみが可能であるという文は、皆無である（安井 1978：219）。

3. 4. 2 総称と非総称の意味的関連性

総称は、「非総称の指示範囲が拡大された場合」であると考えることができる。まず、非総称の概略的な意味を見てみよう。

(30) (i) $a(n) + N_{sg}$

N の類に属する任意の単数の成員

(ii) $\phi + N_{pl}$

N の類に属する任意の複数の成員（または、N の類に属する任意の複数の下位類）

(iii) $the + N_{sg}$

N の類に属し、文脈上唯一の単数の成員

(iv) $\phi + N_{sg}$

N の類に属する任意の量の成員

それに対して、総称は、概略、次のような意味をもつ。

③1) (i) $a(n) + N_{sg}$

Nの類に属する任意の単数の成員のすべて

(ii) $\phi + N_{pl}$

Nの類に属する任意の複数の成員のすべて（または、Nの類に属する任意の複数の下位類のすべて）

(iii) $the + N_{sg}$

Nの類それ自身

(iv) $\phi + N_{sg}$

Nの類に属する任意の量の成員のすべて

③1(i), (ii), (iv)においては、総称の意味は、「対応する非総称の意味が極限まで拡大されたもの」である。これらの場合、「任意の数または量の成員」が、「その任意性ゆえに適格な成員のすべてに拡張されている」のである。ところが、③0(iii)の非総称の $the + N_{sg}$ は、「Nの類…の成員」とあるように、「個の観念」を伴うのに対して、③1(iii)の総称の場合には、類だけが含まれ、個は捨象されている。総称の $the + N_{sg}$ （例. *the beaver*）は、明示的なNのほかに「文脈によって決められる一段高次の非明示的なN'」を伴い、Nは「このN'の類の一成員」（例. 哺乳類の一成員）となっていると言える（井上ほか 1985: 457-458）。*the house on the corner* などにおける総称的用法でない定冠詞が、「種族の個体」に関して、「外ならぬ（あるもの）」を示しているのに対して、総称的用法の定冠詞は、「種族そのもの」に関して、「外ならぬ（あるもの）」を示している。定冠詞 *the* は、総称的であろうとなかろうと、「外ならぬ（あるもの）」を示すという働きの点では、全く同じである（安井 1978: 213-214）。

3. 4. 3 総称の意味を引き出す要因

総称は、「一定の資格を備えた（主語や目的語の）名詞句」に付与される「意味特徴」である。ただし、この意味特徴は、「文全体の意味解釈」を行う際に初めて明らかにされる。総称の解釈は、「きわめて特殊な条件」のもとでのみ得られる（井上ほか 1985: 466）。

主語名詞句の総称性を決定するのは、「述語動詞（あるいは形容詞）」である。③2のような場合、主語名詞句が総称用法であることは決してない。

③2) *The door is open.*

これは、*open* という形容詞が、*wide* や *long* のような形容詞とは異なって、「相対的ではなく、絶対的な性質」を表す単語であることと関係がある。「相対的でない状態」というのは、通例、「一時的なもの」であり、一時的な状態というものは、「時を越えた恒久的な性質」を要求すると考えられる総称用法と矛盾することになる。相対的でない状態が一時的な状態であるのは、それが「一種の緊張状態」であって、「条件が少しでも変わると、他の状態に移行する潜在的性質」をもっているからである。例えば、③2においては、ドアは開いているが、その前か後には、「閉じられている潜在的可能性」がある（安井 1978: 220）。

また、次の(33)の主語名詞句が、非総称用法のものであると決定できるのも、「述語動詞の種類や用法」によってである。

(33) An elephant stepped on my car.

(33)における stepped のように、「1 回限りの一時的出来事」を表すとは考えられない動詞が用いられている場合、その文の主語が総称的な意味をもつことはない(安井 1978:225)。

「総称・非総称の意味的区別に関与している述語」には、次のようなものが含まれる(井上ほか 1985:468-469)。

第一は、「述語名詞類(すなわち be + NP)」である。

- (34) a. A whale is a mammal.
- b. Whales are mammals.
- c. The whale is a mammal.

この種の述語は、「定義」や「帰属」などを表すことが多く、総称文にもっともよく見受けられるものである。

第二は、「事物の種類を表す主語を要求する述語」である。

(35) Palm trees are widespread.

この種の述語には、次のようなものが含まれる。

common, rare, numerous, extinct, indigenous to ..., be in short supply, be decreasing in numbers, be fast disappearing.

第三は、「『特質』(property)を表す形容詞」である。

(36) Doctors are intelligent.

この種の形容詞には、次のようなものが含まれる。

beautiful, boring, crazy, tall, fat, insane, etc.

これに対して、次のような「『状態』を表す形容詞」は、非総称の意味を引き出す。

sick, hungry, tired, alert, clothed, naked, drunk, stoned, closed, open, etc.

(37) Doctors are available.

付. 実験授業から

実験授業は、私立北星学園余市高等学校（北海道余市町）の1年生を対象に、1990年度の1学期に実施された。ただし、2. で、その大部分を示した教授プログラムは、あくまでも、実験授業で用いられた教授プログラムの原案である。1年生4学級を一人で担当している教師が、筆者と打ち合わせを行なった上で、原案に基づいて教授プログラムを作成し、これを用いて授業を行なった。筆者は、A組とB組の授業を観察した。

以下では、「1. 主語の内部構造」の「(1) 名詞句が主語として働く場合」の部分の授業の記録を、断片的に示す。それぞれの授業記録に先立って、実験授業で用いられた教授プログラムの該当部分を、簡単に紹介する。また、授業記録の後には、今後、教授プログラムをつくりかえる上での課題を示すことにする。

付. 1 「(イ) 冠詞」の部分の授業

実験授業で用いられた教授プログラムの、原案の教授プログラムの p. 7 に対応する部分は、次のようになっている。the と、a/an は、それぞれ、「きみとぼく、お互いが知っている物／人の前につける」、「ぼくは知ってるけどきみは知らないであろう物／人の前につける」と説明されている。また、the の説明と、a/an の説明には、それぞれ、Geoffrey Leech, *Semantics* (1981²), p. 157 の図解と、この図解の中のネコを、話し手と聞き手の共有知識集合から話し手のみの知識集合に移したものとが添えられている。

A組では、原案の p. 7 に対応する部分の授業において、教師が説明をした後、次のようなやり取りがなされた。

教師 : この使い分け、わかった? わかる?

M. Y. : 先生、じゃあさあ、……。何、これ? どういう意味、これ? ネコ知らないって、何なの?

教師 : ぼくは知ってるの、でもきみは知らないネコなの。

M. Y. : ネコのこと知らないの?

教師 : だから、M さんのうちで飼っている「ミケ」というネコがいるとするでしょう。でも、そんな、飼っているネコ、先生知らないとするでしょう。それで、そういう話をするときに、……。[黒板の図解の中の話し手と聞き手の共有知識集合の部分に斜線を引きながら] この、これって、共通だよ、共通の部分。

M. Y. : ああ。

教師 : わかった?

M. Y. : わかった。

教師 : そうじゃないときは、a を使う。単なるネコっていう意味を表します。

O. D. : お互い知らなかったら、どうするの?

教師 : そういうときも a を使う。で、知っている同一のネコを話すとき、共通部分があるときは、the を使う。

M. Y. の質問から、教授プログラムに、次のような説明を盛り込むことにしたい。the で始ま

る名詞句は、「それらの指示が、話し手と聞き手の共有の知識を通して、唯一的に決定可能である」という想定を伝達する (Leech 1981²: 289)。「共有の知識」というのは、例えば、話し手が“Where's the cat?” と言えば、聞き手が、「[話し手] がどのネコのことを言っているのか」承知している、と話し手が想定しているということである。「唯一的に」というのは、聞き手は、「問題になっている一匹のネコ」を、「cat という単語の他のすべての指示対象」から区別して、選び出すことができるにちがいない、ということである (Leech 1981²: 157)。定名詞句表現が用いられるのは、その表現の指示対象 (の唯一性) が聞き手にわかっていると話し手が判定している場合である (→ 3. 2)。

O. D. の質問は、(不定) 名詞句が非特定のである場合に言及したものと解釈できる。新しい教授プログラムでは、与えられた名詞句の指示を聞き手が決定できるかどうかという定性 (→ 3. 2) だけでなく、話し手に認知可能な指示対象が存在するかどうかという特定性 (→ 3. 3) も取り扱うことにする。

付. 2 「(ウ) 名詞の数」の部分の授業

授業で用いられた教授プログラムの、原案の p. 12 に対応する部分は、次のようになっている。(問題) では、不可算名詞が、関係のある可算名詞とともに、対比されて提示されていない。ただし、13. money と 14. coin, 18. pig と 19. pork が、それぞれ、隣り合わせに示されている。

A 組では、原案の p. 12 に対応する部分の授業で、(問題) の正答を確認している最中に、17. work の可算性を答えるように指名されていた T. M. が、「何が何だかわかんないよ、全部が。」「何が数えられるの?!」と異議申し立ての発言をした。

B 組では、(問題) の 9. bread の可算性について、教師が S. K. に指名したところ、S. K. は「C [=可算]。』と答えた。横から、U. S. が「数えられるべや。」と発言した。教師が、正答は U [=不可算] であることを告げたところ、次のようなやり取りになった。

U. S. ほか：何でよ!!

教師：アンパン 1 個、2 個って数えたくるでしょ。でもね、一つのパンのかたまり、一切れのパンって考えるから。

U. S.：それ二つあれば、2 個になるでしょ。数えられるでしょ。

教師：そうなんだけど、数えられないの、アメリカ人の感覚では。数でなく、量でいくから。量なの。

U. S.：何、それ?!

教師：切るでしょう、トーストとかでも。1 個、2 個とか数えなくて、量でいくから。

U. S.：勝手じゃない、それ。

教師：そうなの、勝手なの。でも、アメリカ人の勝手をここで知らなくてはいけない。日本人の感覚と違うでしょ、ここは。

A 組の T. M. の発言は、部分的には、教授プログラムに、与えられた名詞が可算名詞であるか不可算名詞であるかを判定するためのテストが明示されていないことを非難したものと解釈できる。現在の教授プログラムは、名詞の可算性を、意味論的あるいは概念的 (notional) に定義し

ているが、「名詞の、さまざまな型の決定詞と結合する潜在能力」(Huddleston 1984: 246)の点から、統語論的な概念 (concept) として定義するようにつくりかえるべきだろう。ただし、ここでいう「決定詞」には、one, two, threeなどの「基数詞」も含まれている (Huddleston 1974: 245)。実は、英語には、「不定冠詞の a [/an] と共起することはできるが、数詞と共起することはできない」という名詞が存在する。

- (1) a. He did me {a / *one} kindness.
 b. He did me *two kindnesses.
 (2) There was {a / *one} silence.

これとは逆に、「不定冠詞と共起することはできないが、数詞と共起することはできる」という名詞は存在しない。したがって、「可算名詞か否かのテスト」は、「数詞との共起性」に求めるのがよいということになる (安井 (編) 1987: 12-13)。なお、すでに、現在の教授プログラムの p. 8 で、共起する数詞 (one 対 two, three, etc.) によって、[可算] 名詞の単数形と複数形とを区別している。

また、B組の U. S. の発言は、名詞の可算性が、意味論的にも、明確に定義されていないという教授プログラムの難点を指摘したものだろう。ただし、上で、名詞の可算性を、統語論的な概念として、定義し直すことに決めた以上、課題は、「現実の、名詞の具体例の解釈」を可能にするような、名詞の可算性の意味論的な相関物を取り扱うということになる。その意味論的相関物とは、「境界づけられ性 (boundedness)」という概念 (Huddleston 1984: 246) である。例えば、名詞 <cake> は、次のように、いくぶん異なって解釈される。

- (3) a. I'd like another cake.
 b. You shouldn't have eaten so much cake.

(3 a)では、<cake>は、「境界づけられた (bounded)、あるいは、個別化された (individuated) 解釈」を有し、「ある一つの単位」, 「離散的な (discrete) 存在物」と考えられている、あるいは、知覚されている。それに対して、(3 b)では、<cake> は、「境界づけられていない (unbounded) あるいは、質量・かたまり (mass) の解釈」を有する。この場合、単純に、「その物質 (substance) から成る何らかの境界づけられた単位」というよりはむしろ「物質としての物質」が問題にされている。<cake> は「‘具象’名詞 (‘concrete’ noun) (物質または物質的対象を示す名詞)」であるが、同じ区別は、「‘抽象’名詞 (‘abstract’ nouns)」にも見られる。

- (4) a. He then pointed out another difficulty.
 b. He hadn't expected to have so much difficulty in persuading her.

(4 a)では、「困難」は、(4 b)においてよりも、「もっと特殊化された (particularized)、もっと限界づけられた (delimited) —— もっと境界づけられた ——」ものとして提示されている。

参 考 文 献

- 有村兼彬・天野政千代. 1987. 『英語の文法』, [英語学入門講座・第8巻], 英潮社新社.
- Crystal, D. 1988. Rediscover Grammar. London : Longman.
- Ek, J. A. van and N. J. Robat. 1984. The Student's Grammar of English. Oxford : Basil Blackwell.
- Huddleston, R. 1984. Introduction to the Grammar of English. Cambridge : Cambridge University Press.
- . 1988. English Grammar : An Outline. Cambridge : Cambridge University Press.
- 井上和子・山田 洋・河野 武・成田 一. 1985. 『名詞』, 「現代の英文法」第6巻, 研究社出版.
- Leech, G. 1981². Semantics. Harmondsworth : Penguin.
- . 1983. Principles of Pragmatics. London : Longman [ジェフリー・N. リーチ『語用論』, 池上 嘉彦・河上誓作 (訳), 紀伊國屋書店, 1987年].
- . 1989. An A-Z of English Grammar and Usage. London : Edward Arnold.
- 中村 捷・金子義明・菊地 朗. 1989. 『生成文法の基礎——原理とパラミターのアプローチ——』, 研究社出版.
- 大場昌也. 1981. 『これからの英文法』, ジャパン タイムズ.
- 大竹政美. 1988. 「外国語教育における“言語活動”の下位区分——教育内容体系としての教科カリキュラムの構造に基づいて——」, 『教授学の探究』第6号, 北海道大学教育学部教育方法学研究室, pp. 91-102.
- . 1989. 「コミュニケーション文法としての教育英文法——英語の態への適用——」, 『北海道大学教育学部紀要』第52号, pp. 129-144.
- . 1990. 「外国語教授理論の構築を目指して——学習者に形成する“言語の知識”に関する試論——」, 『北海道大学教育学部紀要』第54号, pp. 113-125.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. A Comprehensive Grammar of the English Language. London : Longman.
- Swan, M. 1984. Basic English Usage. Oxford : Oxford University Press.
- Wekker, H. and L. Haegeman. 1985. A Modern Course in English Syntax. London : Croom Helm.
- 安井 稔. 1974. 『英語学の世界』, 大修館書店.
- . 1978. 『新しい聞き手の文法』, 大修館書店.
- . 1982. 『英文法総覧』, 開拓社.
- (編). 1987. 『例解現代英文法事典』, 大修館書店.
- . 1987. 『英語学概論』, 「現代の英語学シリーズ」〈第1巻〉, 開拓社.
- . 1988. 『英語学と英語教育』, 「現代の英語学シリーズ」〈第10巻〉, 開拓社.
- ・中村順良. 1984. 『代用表現』, 「現代の英文法」第10巻, 研究社出版.